

夢うつつの内に金環日食を眺めていた時に、ふと、脳裏をかすめた光景がある。

太陽の悲しげな姿は、おびえる大地に鉛のような光を投げかけ、星群の中に赤い松明の火が燃えるのが見られ、驟雨にまじってしばしば血が滴り降ってきた。暁の明星の面も錆色に覆われ、月は血にまみれていた。いたるところで地獄の鳥である梟が凶兆を告げ、また象牙の神像が涙を流すかと思えば、神聖な杜では悲哀のすすり泣きや叫び声が聞こえ、黒雲のなかで武器の音、恐ろしいラッパの響き、天を突く角笛が悪業を予告していた。

古代ローマの文人オウィディウスが『変身物語』で記すカエサル暗殺の凶兆だ。いかに犠牲を捧げてよい兆しは現れないばかりか、古来の肝臓占いをおこなっても変事が近づいていることを告げるばかりであったという。その通り、紀元前四四年三月一五日、カエサルは、元老院の集会所にあてられていたフォロ・ロマーノのクリア・ポムペイアという建物で刺殺された。しかし続けてこの文人は、カエサルの魂はウエヌスによって死体から抜き取られ、天空へと運ばれる途中、燦然と輝いて燃え出し、己自身で天まで駆け上がった。きらめく星になったとして、カエ

プロフィール
國學院大學文学部教授。西洋中世美術史や死の図像学を専門とする。15、16世紀のヨーロッパで広がった図像「死の舞踏」についての研究をライフワークとしている。おもな著作に「死を見つめる美術史」（ポーラ文化研究所、1999年。芸術選奨文部大臣新人賞）、「死の舞踏」への旅——踊る骸骨たちをたずねて（中央公論新社、2010年）、「内蔵の発見——西洋美術における身体とイメージ」（筑摩書房、2011年）など。

千字文

終末の兆し

小池 寿子

サル死後七日目に空に彗星があらわれたことを神話的に記す。そこには、際立った明暗の対比のなかで滅びゆく古代世界の景観がある。

その光景は決して過去のものではなく、天変地異の続く昨今の世の中を映す鏡のようではないか。やがて何が起る、そのような不安と緊迫感、時代は下って一四一〇年前後、都市バリの状況を綴った一市民の日記にもあらわれる。度重なる疫病の蔓延に加え、百年戦争後半に入って骨肉の争いと無政府状態にあったパリを、天変地異が襲う。ある八月の早朝、突然さまざまの雷鳴が轟くと、固い石で丹念に造られていた聖母マリア像は、落雷で真ん中から砕け散って遠くまで飛ばされたという。翌年六月には雷が降り、風が吹き荒れ、雷鳴が轟きわたる。さらに翌年の復活祭には激しく雪が降ってセーヌ河は凍結して小さくなったかと思うと、続く年には大氾濫を起す。物資は運べず、生活は困窮して価格高騰となるものの、パリの城外には追いはぎが徘徊して何人も襲う。一五、一六世紀にヨーロッパを席卷する「死の舞踏」流行前夜のことである。歴史は人々の力によって動くとはいえ、天変地異は、はるかに大きな力で世界の様相を変え、人知を超えた力の存在を、脳天をかちわることく知らしめる。そう実感する昨今である。

月刊 みんなの 8月号目次

- 1 エッセイ 千字文
終末の兆し 小池 寿子
- 2 特集 座談会 [特別展] 世界の織機と織物
織って! みて! 織りのカラクリ大発見
出席者 吉本 忍
井関 和代
柳 悦州
上羽 陽子
- 6 すべてはタテ糸から始まった! 古川 幹雄
- 8 触ってみる! 感じてみる!
——織物再発見 上羽 陽子
- 10 研究フォーラム
「身分証明書」は「わたし」を証明できるのか
陳 天璽
- 12 みんなの Information
- 14 企画展関連写真展のご案内
写真展 「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」
から企画展 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」へ
日高 真吾
- 16 地球ミュージアム紀行
入場無料からみえてくるもの
レバノン・サイダ旧市街の博物館群
菅瀬 晶子
- 18 多文化をあきなう
社会を変えたくて——アマチュアの「あきない」の素顔
佐々木 玲子
- 20 異聞逸聞
エチオピア、アムハラ人の本音と建前
川瀬 慈
- 21 みんなの私の逸品
モンのスカート
宮脇 千絵
- 22 フィールドで考える
アポリジニ研究始め
小山 修三
- 24 次号予告・編集後記